

ねんど ちゃざん かいがてん
2026年度 茶山ポエム絵画展

ChAZAN Poems

茶山ポエムの絵を描こう。



しゅ さい こうえきざいだんほうじん げいじゅつぶんかざいだん かんちゃざんきねんかん
主 催／公益財団法人ふくやま芸術文化財団 菅茶山記念館
きょう さい かんちゃざんけんしょうかい
共 催／菅茶山顕彰会
こう えん かななべじゅつきょうかい ふくやましきょういくいいんかい
後 援／神辺美術協会・福山市教育委員会

ChAZAR POEMS

茶山ポエム^の絵を描こう。

だれでも菅茶山^{かんちゃざん}は偉い人^{えいひと}だと知っています。茶山^{ちゃざん}の本当^{ほんとう}のすばらしさは、その詩^しにふれることで、より深く理解^{ふかりかい}できます。なんねんながつ^{なんねんながつ} う なに おほ 何年何月に生まれ、何をしたかということをおぼえるより、詩^しをひとつ味わう^{あじ}ほうが、よほど茶山^{ちゃざん}を知ることになります。ちゃざん^{ちゃざん} し げんだいじん^{げんだいじん} つう 茶山の詩はロマンにあふれています。現代人^{げんだいじん}に通じるリアルな描写^{えいぎょう}力^{ちから}をもっています。だから絵^えになるのです。

しかし、今^{いま}、残念^{ざんねん}ながら漢詩^{かんし}は見ただけで眉^{まゆ}をしかめそうになります。そこで、茶山^{ちゃざん}の詩^しを現代詩^{げんだいし}に翻訳^{ほんやく}し、わかりやすくしました。パンフレットの12題^{だい}の詩^しをよく読んで^{よみ}（詩^しは声^{こえ}を出^だして読むものです）浮かんだイメージ^{えいぎ}を絵^えにしてください。かならず頭^{あたま}に絵^えが浮かんできますよ。そして絵^えを描^{えが}いているうちに、きっとあなたは茶山^{ちゃざん}が大好きになるはずです。

2026年度 茶山ポエム絵画展 応募要項

- 1 募集対象 福山市および近隣の、保育所（園）・こども園・地域型保育事業（以下「保育所等」と表記します）・幼稚園・小学校・中学校・高等学校の園児・児童・生徒。
- 2 応募方法 本要項内の課題12題から1人1点の出品ができます。
- 3 作品規格 4つ切り画用紙
- 4 画材 水彩・クレヨン・クレパス・色鉛筆・アクリル絵の具など自由です。ただし油彩は不可。
- 5 画法 水彩画・版画・デザイン画・切り絵・貼り絵（ちぎり絵）など自由ですが、油彩画・レリーフ（浮き彫り）は除きます。貼り絵の場合はあまり立体的にならないようにしてください。
菅茶山は江戸時代の人ですが、絵の内容の時代は問いません。
- 6 応募〆切り **2026年11月15日（日）午後5時まで**

※別紙の出品票に画題・名前・学校・学年・組名を記入のうえ作品の裏に落ちないように、しっかりと貼って提出してください。
※保育所等・幼稚園・学校（クラス・クラブ含む）で応募される場合には、以下の2点に必要事項を記入し、持参又は郵送にてご応募ください。
①出品票（作品の裏にはがれないように貼付してください。）

②出品者名簿CD-Rなど外部記録媒体にデータを入れたものを持参、またはメールでご提出ください。
※CD-Rなどの場合、書き込まれていない事がありました。書き込まれているか再度確認をお願いします。
※個人で応募される場合は、以下の必要事項を記入し、持参又は郵送にてご応募ください。
①出品票（作品の裏に貼付してください。）
※出品票・出品者名簿については、2026年8月1日（土）以降に下記のアドレスよりダウンロードをしてください。
※読みにくい名前の場合、備考欄に読み仮名を入力してください。
◇URL: <https://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/site/kannabe-kanchazan/>
E-mail: kanchazan-kinenkan@city.fukuyama.hiroshima.jp
- 7 出品先 菅茶山記念館 〒720-2122 福山市神辺町大字新湯野30番地2
電話・ファクシミリ 084-963-1885
- 8 審査・表彰 保育所等・幼稚園、小学校各学年、中学校・高等学校の各部門ごとに審査のうえ、それぞれ最優秀賞・優秀賞・入選を選び、賞状と賞品を贈ります。
- 9 審査員 神辺美術協会会員
- 10 授賞式 菅茶山記念館ロビー 2027年1月9日（土） 午前10時～
- 11 個人情報の取扱いについて 収集しました個人情報（学校名、学年、名前、作品）は主催者及び共催者が行う活動に必要な範囲（審査、発表、通知、表彰式、ポスター等各種印刷物、展覧会及び巡回展など）において使用します。
- 12 作品の返却 最優秀賞・優秀賞の作品については、巡回展（市役所ロビー展、まちなみ格子戸展など）で活用させていただきますので、約1年間お預かりした後、各園・各校にお返しします。そのほかの作品については、菅茶山記念館展終了後にお返しします。
- 13 展示会 菅茶山記念館展 2027年1月9日（土）～1月31日（日）

福山市役所ロビー展 2026年7月21日（火）～24日（金）

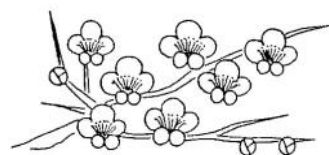
※福山市役所ロビー展は昨年度（2025年度）の最優秀・優秀作品を展示します。
- 14 主催 公益財団法人ふくやま芸術文化財団 菅茶山記念館

共催 菅茶山顕彰会

後援 神辺美術協会・福山市教育委員会
- 15 問い合わせ 菅茶山記念館（電話084-963-1885）

①「梅」

やま たにま おくふか
山の谷間の奥深く
ちい むら
小さな村があつたんだ
いえ し ごけん
家は四、五軒 さみしいな
だれ こ
誰も来ないよ さみしいな
ところが村人 梅の木植えた
それから後の 谷間の春は
はなみ ひと おお
花見の人で 大にぎわい



「画山水」 (原詩)

がさんすい
溪村三五戸
一向絶風塵
自種梅花後
春來引外人
けいそん さんごこ
溪村の三五戸
いっとうふうじん ぜつ
一向風塵を絶す
ばいか う よ のち
梅花を種えて自り後
しゅんらいがいじん ひ
春來外人を引く

【大意】 谷あいの三戸か五戸のさみしい村は、俗塵から離れて

生活していた。ところが、梅の花を植えてより後は、春が来れば方々から花見の人が来るようになった。

②「蝶」

かぜかぜ
風風ざざーっと 木の花散った
ちよう
蝶があわてて仲間かと
と お
飛んで追いかけて
いっしょに落ちた
これはしまった 花だった
あわてて蝶は飛びかえり
枝にとまって
知らん顔

「蝶七首」 (七) (原詩)

ちようしちしゆ
衝風觸花樹
花落撲吟榻
一片忽還枝
知佗是蝴蝶
しようふうかじゆ ふ
衝風花樹に触れ
はな お ぎんとう
花落ちて吟榻を撲つ
いっぺんたちま えだ かえ
一片忽ち枝に還る
し た こ こちよう
知んぬ佗は是れ蝴蝶なるを

【大意】 突風が花盛りの木にあたり、散った花びらが腰掛にあたる。おや、その一ひらがすぐに枝に還るではないか、ははあ、あれ

は花かと思っていたら蝶だったのか。



③「夏の思い出」

けいりゅう すなはま
溪流の砂浜に

すず だい だ
涼み台を出しての。

こしか
腰掛けて

つき ま
月を待ちようた。

まえ やま
前の山から

つき はんぶん
月が半分ほどあがった――。

わらへ
そのとき童らがの、

ふうりゅう なが
そりや風流な眺めを

そ
添えてくれた。

わらへ すな
童らは砂をあつめて

みず
水たまりをつくつての。

つき うつ
それに月を映して――

みず はげ
その水を激しゅう

かきまぜて

きらきらキラツと金鱗を

つくつてくれたんじや。

「夏日雑詩」(九) (原詩)

りょうぼつ けいひん む
涼棚待月向溪濱

あたか あ ぜんぼうはんりん のほ
恰も値う 前峯半輪を上す

どうじわ ため しょうがい そ
童子儂が為に勝概を添う

さ あつ みず げき きんりん な
聚沙激水作金鱗

りょうぼつ けいひん む
涼棚月を待ちて溪浜に向かう

あたか あ ぜんぼうはんりん のほ
恰も値う 前峯半輪を上す

どうじわ ため しょうがい そ
童子儂が為に勝概を添う

さ あつ みず げき きんりん な
沙を聚め水を激して金鱗を作す

たにがわ すず だい すわ つき で
【大意】谷川のほとりで、涼み台に座って、月の出を

ま まえ みね まんげつ はんぶん かお
待っていると、ちょうど前の峯から満月の半分が顔を

だ にちゅう わたし こ よ けしき
出した。日中、私のために子どもたちが好い景色を

そ すな せ いきお みず
添えようと、砂をあつめて堰きとめて、勢いよく水を

なが こ なか つき うつ きん うろこ つく み
流し込んで、その中に月を映して金の鱗を作って見せ

てくれたのだ。

④「御領山大石の歌」

（しりょう やま）

御領の山の いただきは

みわた

見渡すかぎり 石の山

おお

大きな石は 山のように

ちい

小さな石は 家のよう

とお

遠くで見れば 牛の群れ

ちか

近ごろ世の中 のんびんだらり

わたしはここで うさばらし

まえ

石よ、お前は この山に

かくれているのが おにあいだ

わたしも石に なりたいよ

【大意】御領山上には大石が多い。あるものは群がりあるものは重なりあつて、けわしく入り組んでいる。大きいものは山のごとく、小さいものでも家ぐらいはある。見渡せば遙か遠方の堤で多くの牛を放牧しているようだ。さて、私はこの世間に他人へのねたみが多いことを疎ましく思う。お前（石）がそのような世情について、何も関わりのない相手であるのが嬉しくて、度々ここへやって来ている。今日、一杯の酒によって、心の奥にあるわだかまりを発散しようと思う。私はしばらく心のおもむくままに歌をうたうから、お前はいい加減に聞き流してくれよ。この頃は、朝野（官と民）ともに古いしきたりにこだわって、何かしようとすれば、すぐに彼らの機嫌をそこねてしまう。気の毒にもお前に強い信念があることを誰も認めてくれないからには、聞かず言わずにその身を全うするがいい。石や石や、お前は人里はなれた林や野に住むのがお似合いだ。才能をつつみ隠して世間の雑踏に近づかないように。石が仙人に逢って羊になった話があるが、それはもう余計なこと。石が僧の説教を聞いたという話もあるが、それもお前の本分ではないだろう。まして、同じ石でも建平界を争う石、下邳で張良に兵法を授けた黄石公になろうとも思っていないだろう。

「御領山大石歌」

（原詩）

御領山頭大石多

或群或疊闘嵯峨

大者如山小屋宇

迥如萬牛牧平坡

吾嫌世上多猜忌

樂子無知屢來過

此日一杯發幽興

吾且放歌子妄聽

如今朝野尚因循

苟有所爲觸渠嗔

憐子剛腸誰采錄

不如聾默全其身

石兮石兮林栖野處得其所

韜晦慎勿近囂塵

逢仙化羊已多事

參僧聽經非子眞

況作建平爭界吏

況爲下邳授書人

（読み下し）

御領山頭大石多し。或は群し或は疊し嵯峨を闘わす。大なるは山のごとく小なるは屋宇、遙かに萬牛を平坡に牧するが如し。吾れ世上に猜忌多

きを嫌う。子が知るなきを樂しんで屢来り過る。此の日一杯幽興を發し、

吾れ且く放歌せん、子妄りに聴け。如今朝夜因循を尚び、苟も爲す所

有れば渠の嗔に觸る。憐れむ、子が剛腸誰か采録せん。聾默して其の身を

全うするに如かず。石や石や林栖野處其の所を得たり。

韜晦慎んで囂塵に近づく勿れ。仙に逢い羊に化す已に多事、僧に參じ經

を聴く子が眞に非ず、況んや建平界を争うの吏と作るをや。況んや下邳書を

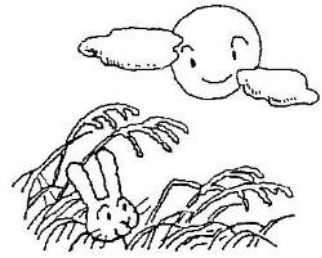
授くる人と爲るをや。

⑤ 「夕日」

ゆうひしず
夕日沈んだ 空まだ赤い
た わかなえ
田んぼの若苗
も かさ
萌え重なって
とお かみなり
遠くで 雷
どこかで雨か
あめ
山のてっぺん 雲の中
やま くも なか

「所見」 (原詩)

落日残紅在 落日残紅在り
らくへつじんこう ざう
新秧嫩翠重 新秧嫩翠重なる
しんおうどんすいかさ
遥雷何處雨 遥雷何れの処の雨ぞ
ようらいいず
雲没兩三峰 雲は没す兩三峰
くも ぼつ りようさんほう



【大意】 入り日が西の空を赤く染めている。野山のみどりにこ
い ひ にし そら あか そ
まれた稲の苗のみどりが更に目に目にしみる。遠雷の底鳴りはどこに
いね なえ さら め えんらい そこな
あめ ふ 雨を降らせているのか、みるみる雨雲がひろがって、二つ三つの
みね 峰をかくしてしまった。

⑥ 「ホタル」

まいよ こ
毎夜、子どもたちは
ほたる かこ
螢を籠いっぱいにつかまえて
やなぎ
それを柳の木にかけて
すず だい て
涼み台を照らす。
子どもは言う、
ほたる ひ
「螢の火もやはり本当の火だ。」と。
おうぎ
「扇であおげば燃えるよ。」
て
「手をかざすとあたたかいよ。」



「螢七首」 (五) (原詩)

連夜収来満練囊 連夜収め来って練囊に満つ
れんや おさ きた れんのう み
柳陰懸照納涼牀 柳陰 懸けて照らす納涼の牀
りゅういん か て のりよう しやう
童言螢火亦眞火 童は言う「螢火も亦た眞火。」と。
わらべ い けいか ま しんか
揺扇將然加手陽 「扇を揺すれば将に然えんとし
おうぎ ゆ まさ も
て くわ 手を加うれば陽かし。」と。

【大意】 毎夜ホタルを捕らえて練り絹の袋一杯にし、柳の木陰に
まいよ と ね ぎぬ ふくろいっぱい
懸けて涼み台を照らす。子どもは言う「ホタルの火もまた本当の火
か すず だい て こ い ほんとう ひ
だ。団扇であおぐと燃えだしそうになり、手をかざせば暖か
うちわ 暖か
い。」と。

⑦ 「久しぶりの晴天」

梅雨の長雨二十日もつづく

ところが

きょう

今日はうれしいことに

西の窓から夕日が入る

すると

茂った枝の間に

ひな鳥元気に羽ばたき始め

苔もかわいた石の上

蟻が行列はじめたよ



「新晴」 (原詩)

梅霖惱我二旬強

忽喜西窓納夕陽

林密枝間雛習羽

苔乾石上蟻成行

梅霖、我を悩まして二旬強

忽ち喜ぶ、西窓夕陽を納むるを

林密にして、枝間雛羽を習い

苔乾いて、石上蟻行を成す

【大意】梅雨の長雨に降りこめられて、ぱっとしない日がもう

二十日余りにもなる。今日は、久しぶりに西側の窓から夕陽が

差しこんできて、急にうれしくなる。木々の茂みの中では、ひ

な鳥が羽ばたきだし、苔の乾いた石の上を蟻が行列をつくって

いる。

⑧ 「あさがお」

うちのあさがお かわってる

中国から来た種という

花は大きくあざやかで

咲いてる時間も長いんだ

曇りの日にはいつだって

タぐれどきまで笑顔だよ

「秋日雑詠」 (三) (原詩)

我園牽牛種頗奇

傳言本自漳州移

色濃花大能堪久

每值陰天晚未萎

我が園の牽牛 頗る奇なり

伝え言う 本と漳州より移すと

色は濃に花は大にして能く久しきに堪ゆ

陰天に値う毎に晩に未だ萎まず

【大意】わが畑の朝顔の種類は相当変わっている。言い伝えに

よると、もと中国の漳州 (福建省) から移したものとのこと

だ。色は濃く花は大きくて長い間咲き続け、曇りの日はいつも

夕方になっても萎まずにいる。



⑨「晩秋スケッチⅡ」

「お花を 少々 下さいな」

声は となりの 和尚さま

「さあさあ どうぞ 菊に萩

秋海棠も 副えましょう」

「さつきはどうも ありがとう

お礼のしるし」と届いたは

とりたて まつたけ かごの中

たちまち かおりが 部屋いっぱい

「秋日雑詠」(十一) (原詩)

隣僧乞我小園芳 隣僧、我が小園の芳を乞う

蕃菊胡枝秋海棠 蕃菊、胡枝、秋海棠

忽挈一籃來作報 忽ち一籃を挈げ來つて

帶泥松蕈滿厨香 泥を帶ぶる松蕈、満厨に香し



【大意】隣のお坊さんが、我が家の小さな庭の草花を求めて来たので、蕃菊と萩と秋海棠を差し上げた。すると間もなく手提げの竹籠を携えてお返しにやって来た。泥がついたままの松茸が、台所一面に良い香りを放っている。

⑩「廉塾」

庭をおおった 柳の木陰

きれいな水が 流れる小川

弟子たちしずかに 硯を洗う

すずしい瀬音が 聞こえてくるよ

「即事二首」(一) (原詩)

垂楊交影掩前楹 垂楊影を交えて前楹を掩う

下有鳴渠徹底清 下に鳴渠の有りて徹底清し

童子倦來閑洗硯 童子倦み來たつて閑かに硯を洗えば

奔流觸手別成聲 奔流手に触れて別に声を成す

【大意】柳の枝の影が家の前の方をおおって涼しそうだ。

その下にせせらぐ一筋の清流があり、水の底が見えるほどに澄ん

でいる。弟子たちが稽古に疲れて休みがてらに硯を洗っている。

速い流れが手に触れて、また別の音を立てている。



⑪「雪の日」
ゆき ひ

きたかぜ
北風ピューピュー

ゆきばな ふ ふ
雪花、吹きあげ吹きおろし

うずまき そら
渦巻つくつて空かける

むら こみち
村の小道カチンコチン

しも
霜のおけしう

ひる
昼なおくずれず

せつじつ げんし
「雪日」 (原詩)

きたかぜ せつぺん ふ
北風 雪片を吹いて

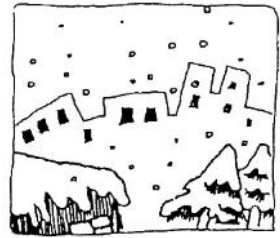
らんぶ はんくう ただよ
亂舞して半空に漂う

さけい ろう てつ じこ
沙徑 牢として鉄の如く

しんてう ひるいま き
晨霜 午未だ消えず

きたかぜ ゆきばな ふ ち
【大意】 北風が雪花を吹き散らして、空中を乱舞している。

すなみち こお てつ かた あさしも ひる き
砂道は凍りついて鉄のように硬く、朝霜は昼になっても消えそ
うもない。



⑫「冬夜読書」
とうやどくしょ

ゆき さんか
ふりつむ雪が 山家をかこみ

きぎ かげ くろ ふか
木々の影が黒く深い

のきは ふうりん
軒端の風鈴 ことりもしない

よる ふ
夜はしんしんと更けわたる

せい みだ しよもつ かたづ
静かん とり乱した書物を片付け

ひと ぎもん
ひとり疑問のことに

おも
思いをめぐらせていると

むかし てつじん じいふ
その昔の哲人たちの心が

ひとすじ あおじろ ひ ほのお
一筋の青白い灯の炎に

て だ
照らし出されてくるようだ

とうやどくしょ げんし
「冬夜読書」 (原詩)

ゆき さんどう よう じゆえいふか
雪擁山堂樹影深

えんれいこう
檐鈴不動夜沈沈

しず かんちつ おさ ぎぎ おも
閑収亂帙思疑義

いっすい せいとう ばんこ じいふ
一穗青燈萬古心

ふ っ ゆき さんちゆう わ や
【大意】 降り積もった雪が山中の我が家をかかえこみ、木々の影

くろ ふか
が黒く深い。ただ夜だけがしんしんと更けてゆく。乱れた書物を収
めて疑問の箇所を考えていると、その昔の先哲たちの心が、
ひとすじ あおじろ ひ ほのお て だ
一筋の青白い灯の炎に照らし出されてくるようだ。



菅茶山記念館

〒720-2122 福山市神辺町大字新湯野30番地2

電話&FAX084-963-1885

<https://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/site/kannabe-kanchazan/>

E-mail kanchazan-kinenkan@city.fukuyama.hiroshima.jp